

第2回 香南市まち・ひと・しごと創生総合戦略策定委員会 議事録

- 開催日時：令和6年2月13日（火）9:30～11:30
- 開催場所：のいちふれあいセンター2階 研修室
- 出席委員：受田浩之委員長、石丸典男委員、小笠原由美委員、中脇正人委員、森川良奈委員、古川和佳委員、田中愉之委員、北川佳代委員、三浦裕司委員、別府誠委員
- 事務局：萩野商工観光課長、小松農林水産課長、猪原こども課長、小川地域支援課長補佐、中島情報政策課長、浜田住宅政策課長、西内企画財政課長、近藤企画財政課長補佐、刈谷、宮崎

【次第】

1. 開会
2. 市長あいさつ
3. 委員長あいさつ

- 委員長 報道でご存じの方も大勢いらっしゃると思うが、私事を少しお話させていただく。4月1日から私が次期高知大学学長の指名を受けた。指名を受けたということで、まだ正式には決まっていないが、3月に入って文部科学大臣等の決裁により正式に決まるということになる。

具体的には4月1日に文科省に行って、辞令を受け取り、正式なスタートとなる。とは言え、11月の終わりにその予定が決まり、12月以降、次期の学内人事や様々な組織改編をやろうと思っており、すでにバタバタと準備を進めている所である。ちょっと立場がこれからは異なってくるが、高知県における高知大学の存在というものを、もっと価値を高めていきたいと思う。

世界のモデルとなるような地域の中核大学として、新たな歩みを刻んでいこうと思う。

本日、人口の話があると思うが、国も人口減少に直面し、それぞれがどうやってこの状況を改善していったら良いか、正解が見えていないという状況である。あるいは、人口維持というのは、具体的にはもうなかなか厳しく、一方で違った言葉があるが、戦略的に縮む、縮んでいくが戦略的に発展をしていく礎を築いていく、という新たな視点が求められているのではないかと昨今強く思う。県の出生数も昨年 3,380 人で事も非常にそれを憂慮しておられる。

そして、そこを何とか改善すべく2期目の公約に、人口減少に立ち向かっていくと高らかにおっしゃっている。それはそれで絶対にやっていかなければいけない。

一方で、人の数というのは、それぞれの努力だけではいかんともしがたい部分で、これも想像に難しくない。

ちょっと違った考え方、パラダイムシフトというか、誰も経験したことのない、あるべき未来というものを創造的に描いていくのが、今、我々に対して一つ求められているのではないかと強く思う。

そこにおける大学のあり方というのを、縦糸横糸のような関係で、あるいは一蓮托生の関係で一緒にできるように大学をあげてしっかりと取り組んでいきたいと思っているところである。

そういう意味で、委員長という立場を長年務めてきたが、地域における大学のあり方を、責任者としてこれから舵取りをしていくという中で、これまで一緒にしてきた皆様方からまた忌憚のないご意見とアドバイスを、今後とも是非お願いする。

本日も忌憚のない前向きなご意見を委員の皆様からよろしくお願い申し上げて冒頭のご挨拶とさせていただきます。

4. 議事

- (1) 令和5年度の目標達成状況（進捗状況シート）及び令和6年度の新たな取り組みについて
- (2) 「魅力ある香南市をつくるアンケート調査」について
- (3) アンケート調査結果（R2～R5年度）の分析について
- (4) 第2期香南市まち・ひと・しごと創生総合戦略の改訂について
- (5) その他

■委員長 それでは議事にしたいが、本日の第2回まち・ひと・しごと創生総合戦略策定委員会を進めたい。

議事に関しては、令和5年度の目標達成状況を現時点で、また、6年度に向けて新たな取り組みについてご提案をいただく。

一方で、魅力ある香南市をつくるアンケート調査の実施をさせていただいており、令和2年から始まり、2年、3年、4年、5年と4年目の結果がすでに出ているということである。

後ほど詳細な説明をいただくことになるが、3年刻みで小学校6年生、中学校3年生、18歳でアンケートを実施した結果、4年目に入ると小学校6年生が中学校3年生に、中学校3年生が15歳、15歳が18歳、と2回目のアンケート対象者になっていくという時間的な変化も明らかになってきている。

こういったアンケートの分析を踏まえて、まち・ひと・しごと創生総合戦略をどのように改訂していったら良いか、また、これまでの取り組みが、子どもたちの香南市に対する思いについてどう反映されているか、あるいは反映されないままであるのか、というところを委員の皆様、施策と子どもたちの思いと紐づけていただき、色々な角度から考察をしていただきたいと思います。

(1) から (4) までをまず一括で説明いただき、その後一括して皆様からご意見、

ご質問いただこうと思う。終了の時間は11時半ということで、1時間以上意見交換の時間を取ろうと思っている。

- 事務局 (1) 令和5年度の目標達成状況（進捗状況シート）及び令和6年度の新たな取り組みについて説明
- (2) 「魅力ある香南市をつくるアンケート調査」について説明
- (3) アンケート調査結果（R2～R5年度）の分析について説明
- (4) 第2期香南市まち・ひと・しごと創生総合戦略の改訂について説明

■委員長 それでは、ここから委員の皆様と自由に討議をしていきたいと思う。先ほど事務局から説明があったとおり、我々委員としての任期を本日、本年度で満了するということもある。

おそらく委員としての交代があるのではないかと拝察する。そういう意味ではこれまでの委員の想い、あるいは今後の香南市まち・ひと・しごと創生総合戦略に対しての励ましというか、先輩として今後に向けてのメッセージを是非残していただき、それに香南市職員の皆様にお答えいただくという形で、是非様々なご発言・ご意見を賜りたいところである。

おそらくアンケートの結果に注目しておられると思うが、このアンケート結果を最初に議論し始めると、ここだけになってしまうと思う。まずは令和5年度の目標達成状況、及びそれを踏まえ令和6年度に向けた新たな取り組みというのが議事（1）にある。資料1のご説明をいただき、これに対してご質問やご意見があれば皆様からまず出していただき、一区切りしたことを確認したうえでアンケートの調査結果と総合戦略との紐づけ、関係性を含めてさらに踏み込んでいきたいと思う。

資料1に関して、委員の皆様は順次振っていくので、質問・コメントができれば簡潔にいただき、そして資料2以降にまたコメントいただくようにしたいと思う。

資料1に関して、順番に委員からご発言いただいでよろしいか。

■委員 資料1について、先ほど事務局の方からご報告あった内容に留意し、補足という意味も含めて少し発言させてもらいたいと思う。

資材高騰、どの企業も非常に厳しいと思う。

農業関係も資材高騰の煽りを受け、経費がかさんできて売り上げが伸び悩んでいる、または経費が押し上げてきて収益が減少している状況で、資料にもあるが、若い後継者がなかなか経営が厳しい状況が続いている。

また、新しく農業を始めた方でも経費がかさんだことで離農するという方もいる。

そういった中で、いかに香南市の中で農家を育成していくかが非常にこれから大事だと思う。

令和6年度に向けては、香南市、また県の方の方策として中山間事業の中で山北の奥になるが、西川地区で9千平米ぐらい段々畑を平らにし農業をしやすいうように、ま

た地域おこし協力隊も育ってきておるので、山北地区でのみかん農家を育成するために、作業しやすい環境を整えていかないと段々畑では重労働が課せられるので、そういう風な計画も今後進めていきたいと思う。

これについては、市または県のご協力をいただくわけである。また、山北地区について、みかんの選果機が平成10年に導入されてもう25年が経過している。これが365日ほとんど稼働している。そういった中、やはり機械なのでかなり故障も出てきており、更新にも向けて2月8日にプロジェクトチームを結成し、今後導入に向けて検討していく方向にもなっている。

非常に厳しい状況ではあるが、魅力ある農業に向けて、やはり若い方が育ってきておるので、そういうのも含めて育成していきたいなと思っている。

■委員長 まず委員の方から一通りご発言いただき、事務局側から補足やコメントに対するご対応について簡潔にお答えできればと思う。それでは次の委員。

■委員 最初に委員長から冒頭あいさつで、戦略的な人口減という言葉があったが、この香南市は、高知県内では移住者が一番多いということを先日教えていただいた。

香南市、南国市、それから香美市の近隣三つの市で高知県内の移住者を引っ張っていけるのかなと思いつきながら聞いた話もある。

そんな中、来年「あんぱん」という、やなせたかし先生がモデルになるドラマが放送されるということで嬉しく思っている。観光は色んな形であると思う。

世界中から観光客を集めて日本の魅力を見てもらい、帰ってもらう、というものがあると思うが、この香南市を含めた南国、香美という3市はそこから移住に繋げるような観光ができるのではないかと考えている。

観光で来た方にも、子どもに向けた取り組みというのが目に見えるような形になったら、この水産業の紹介教材とか、子どもたちに対しての地域を知ってもらうための工場見学とか、こういったことがこの地域でされているんだと、これから来られる観光客の皆さんに知ってもらえたら、そこから移住に繋げられるのだろうなと思いつきながら今回この資料を見ていたところである。

■委員 委員長が冒頭あいさつの中で、高知大学を世界に誇る中核の大学にすることをおっしゃっていたように、色んな、観光から、農林水産業を引き上げていくのに大きなビジョンというものが必要なのかなと思う。

まずそのビジョンがあって、そこから引っ張られる形で、農林水産業では香南市はこうして行くんだからこうしようと、それには、このコロナ禍でパラダイムシフトというか、非常にみんな考えなくてはいけなくなっていく。

その時にグローバルに晒される。性的マイノリティの方たちに対する考え方は人それぞれだけれど、共感していくことになっていくんじゃないかなと思う。

高知新聞なんかでも、大月町の方が出ていたが、今、色んな人たちを、香南市は比

較的自由に受け入れてくれていると思うが、そういったしっかりしたビジョンと、共感していくグローバルな考え方、開かれた感覚がないと人は来ないのではないかな、と。

それと、絶対に縮むのはわかっているのですが、その中で委員長がおっしゃったように、戦略的に縮んでいくから、未来をどのように創造していくのかという大きなビジョンがいるのじゃないのかなと。

ただこうしたらいい、こうしたらいいだけの目先のことでいくと、長い目で見ると、これから40年先、50年先、私はいないと思うが、そういったことまで考えてしっかりしたビジョンを。

もちろんそのとき市長さんも変わっていきなりと思うが、香南市を日本のザルツブルクに、とか委員長が大好きな、私もそういったものが何か、何かはまだわからないが、何かそういったものがあるとワクワクすると思う。

■委員

先ほど委員が言われたことを今日言おうと思って来ていたが、共感する、という部分では、性的マイノリティや外国籍の方など、共感していく世界に入ってきていて、特に、私も近くに農家の方がいらして、外国籍の方と出会うことがすごく多くなった。

子どもたちもそれが当たり前の生活になっている。学校に登校するときには、外国籍の方たちが自転車でたくさん通っているという世界の中で、この資料に関しても、外国籍の方の話題というものが全く出て来ないということが、私の中の印象にある。私は子育ての中の狭い世界しか知らないのですが、子育ての事ばかり言うが、学校の中で外国籍の方の母国料理を振る舞うという交流とかもあったらしく、もっとそういうところに取り組んでいくことも大事なのかなと感じる。それがまた地域とかにもきっと出てくると思う。こちらが知らないことが多すぎる、という感覚である。

あと、資料1-3の漁業に関して、動画の教材となっているが、今は学校に大きなモニターがあるので、リモートとかそういったもので、給食を食べているときに、僕が獲ったシラスだよ、とか紹介や質問ができたりするものがあれば、もっと子どもたちが食いついていくのではないかと思う。

■委員

農業に関して少しお話しさせていただく。委員がおっしゃられたように、非常に今、農業を始めるとするのが厳しい状況。

資材代も肥料代も上がっているし、経費がとにかく大きいので、そういった中で新規に始めようと思うと、うちにも一人新規就農希望で研修している人がいるが、まず十分に生計を立てていくためにハウスを建てるのに3千万円必要で、補助いただいてもその半分は負担しなければいけない。

全く知識のない人にとっては、1千5百万円くらい借金をして本当に生計立てれるの、と心理的ハードルも高いし、始めてみようとなれる人はすごく少ないと思う。

資料1にも書かれているが、兼業でちょっとやってみたいとか、少しだけでも他品

種をやってみたいとか、農業に興味を持っている人というのはそれだけで生計を立てたいという人だけではなく、「ちょっとやってみたいな、そういえばおじいちゃんの家土地があったのでそこで白菜でも作って売ってみたいな」という人達もいると思う。

一括りに資金で補助するだけではなくて、例えば知識を発信してあげるだとか、兼業から専業に代わっていけるようにサポートしてあげるとか、そういったところでもっと農業に触れる人口というのを増やして、そこから農業で生計を立てていく人を増やす、というのが大事なのかなと思う。そういった意味では、私たちはまだ農業者の中では若い方で、色んなことにチャレンジしてやっているほうだとは思っているので、ちょっと興味があるよという人の話し相手というか、ちょっと見に来るハウスの一つとして市の方で紹介してもらって、どんどんと興味を持っていただけたらと思う。

■委員 資料1とかを見ると、仕事における現場は人が足りない。しかし香南市の若者がどんどん出て行っているということを中心に施策とかをされてると思う。

ずっとそれをやってきている現状があると思う。それが無駄とは言わないが、発想の転換と言うか、ピンチをチャンスに変えることで、逆に、出ていった・出ていく若者はどこか県外で色んな修行をしてきて、都市の情報を得て帰ってきたら、すごく育成する手間は省ける。逆転の発想として、出ていくのはいいけれど帰ってくる方に、今までのように出ていかないようにするのではなく、帰ってくるようにするという今までと違った見方をすればまた新しい動きができるのじゃないかなと感る。

■委員 私は銀行員なので、昨年赴任してきて一年経ったところだが、意見というか感想を申し上げたいと思う。

この一年間、野市支店におり、本当にイベントがすごくたくさんあって、どろめ祭りから始まって、なんて楽しいところに来てしまったのだろうと思った思い出がある。

それをはじめ、コロナ明けということもあって色んなイベントが再開できて本当に元気な地域であると思った。

ただ、一つ思ったのが、当行にも香南市に赤岡支店と野市支店の二つ支店があるが、地域差が非常にあるなというのがある。赤岡のほうがお祭りは非常に多い。例えば、野市に住んでいるかたが、赤岡でのお祭りを地元のお祭りと思っているのだろうか、とかそういう風な印象を持ったところがある。野市の地域は多分人口が増えていると思うが、香南市全体でみるとやはり地域差があるなと思うのがこの一年間で非常に感じたことである。

市町村合併の話が多分影響しているのだろうと思うが、ここをもっと、香南市全体で香南市を考えられるような感じになっていけば非常に良いのではないかと思った。

■委員 本日配布されている、「総括に向けて1-1」という資料の最初のページをご覧いた

だきたいと思う。

県の施策のPRではないが、一番上に表として市、県、国ということで、色んな戦略を示されている。

右側に、来年度県の方で高知県元気な未来創造戦略という、その下に人口減少対策交付金を新設予定とある。

予定、というのは県議会で予算を認めていただくということで、予定と記載をしているが、こちらについてはさらに右側に「①基本配分型」と「②連携加算型」というメニューを作っている。

基本配分型というのは、基本額に人口割、県内各市町村の人口に応じて配分をしていく。

交付率10分の10という記載については、通常、県の補助金は市町村が実施される事業に対して2分の1とかいう形の交付率・補助率をかけるが、こちらについては市町村の判断で、どの事業に県費を充てるか、県の交付金を充てるかを自由に判断してください、というやり方に変えるということになる。これについては、基本的に従前の事業に対して拡充をしていただきたいという趣旨で設けている。

連携加算型というのは、新たに県内で率先して取り組んでいただくような事業について、交付率を通常の2分の1よりもさらにかさ上げをして交付します、ということで、4年間限りということにはなっているが、この制度を一度始めると、途中でやめるという選択肢は多分無かろうということになるので、一定年数続くと想像される。これは県内の各市町村の独自性、今まで交付金というのは国とか県がメニューを作ったが、今回は各市町村が独自に考えて人口減少をいかに抑えていくのか、その内容について県に対してご説明いただき、それに対して交付させていただく、という形を取。ある意味、県内市町村での取り合いということになる。

取り合いと言っても、基本的に今の県の考え方は、事業を認められると増額補正をかけていく。

当初予算で足りない部分は途中で足していくという考え方になるので、そういう意味では各市町村の独自性、各地域で色々な考え方、施策、事業展開、地域性があると思うのでそこをしっかりと支援させていただくと考えている。そこも地域の方々、委員の皆様にもこんな事業をやってはと提案をしていただきたいという考え方である。

■委員長

今一通り資料1に基づいて、アンケートのことについてはまず置いて、ほとんどご意見をいただいたということで、あまり質問的なものはなかったように思う。

正直、今一通りうかがって、この香南市のまち・ひと・しごと創生総合戦略策定委員会は素晴らしいと思う。

現場レベルでそれぞれの立場が直面している課題があることは踏まえつつも、香南市の未来をどうやってビジョン化していくか、また、共感というキーワードが出ていたが、あるべき姿を一丸となってどう進めていくかということをも市民の皆様が当事者

として深く考えておられるということ、今のコメントから私自身は感じ取った。まずそれが一点。

コメントすると、グローバルな視点というものをどういう風にここに載せていくか、いまいまだ資料1に関してはその視点が弱い。

おっしゃるとおりである。

高知県のまち・ひと・しごと創生総合戦略においては、海外からの人材というのをKPIを立てていて、確か上方修正し4千という数字が出ていたと思う。

つまり海外からの受け入れは一定の数、上方修正して増やしていこうという考え方がある。

これをどうご当地で踏まえていくか、というのは一つあると思う。

委員がおっしゃったように交流人口から関係人口、そして定住人口へとそれぞれの方々の香南市に対する思いを深めていただくことによって、他人であるところから住民へと変わっていく。

これが今後、「あんぱん」も含め、地域の活動がより外に対して発信していく形になるのでこれを強化していかなければならない、あるいはチャンスであるという非常に重要な視点をお話いただいたと思う。

あと、委員がおっしゃったように、今の色んな技術の発展で、単に「映像としてオンデマンドで編集しました見てください」よりも、リアルに同期型で今を見ていただくというのは、子どもたちにとっても相当インパクトがあるでしょう。

そして、想定を超えた何かが、そこには必ずあると思う。

驚きとか、感動・感激という部分がそこに必ずあり、そしてそれによって職業に対する意識も変わってくる可能性が大いにあると思う。

委員もおっしゃったように、ピンチをチャンスに変えていく。

出て行った方に対してまた戻っていただくような還流を、大きな人の流れを、どのように描いていくのか。ここも今後非常に大きな可能性を秘めているのではないかと思う。

農業に関しては、今資材の高騰、経営に対する圧力が非常にかかっていること、委員、そして委員からリアルな声としてうかがった。今をどう乗り切っていくかを含め、新規就農者の確保については、県のKPIが達成できていないという状況もある。ご当地として、独自の施策や、兼業を専業へとシフトしていくような柔らかな、投資に対するリスクを減らしていくような、そういうハンズオンという仕組みも求められているのではないかなと思う。

最後に人口の話については、常に人の数をどう維持するか、先ほどの話しでも「2060年の人口ビジョンを是が非でも達成するんだ」という気合は良くわかるが、こればかりやっていてどうなのか。

34歳以下の女性の数を増やしていくと公約でも知事がおっしゃっていたので、聞き及びのことかと思うが、実はこの間、県のまち・ひと・しごとの会議があったときに、委員の皆様からも色々な意見が出た。

私も申し上げたのは、34歳以下の女性がこれを見てどう思うのでしょうか、と。上から目線に見えるところがあるのではないのでしょうか、と話しを振っていったところ、委員の方々はこんな風に言われた。

人口をどうするという話しではなくて、先ほども色んなご意見いただいたように、例えば委員の多様性の話、それからインクルージョン。

よくダイバーシティ&インクルージョン、D&Iという言葉を使うが、多様性あるということ全部受け入れる。そして色んな立場の方々を全て包摂していく。これがSDGs的に言うと、誰一人取り残さないというコンセプトと通じるころだと思う。

これがさらに進んでいくと、男女の平等というか、色んな意味で働き方改革の話、同一労働同一賃金の問題、あるいは家事の共有、教育、共に育てる子どもに対する教育環境とか家事分担とか、当たり前と言われているが、事実化されていないから言われ続けている。

そのあたり前を、まず環境として、もっと実質的に、平等というか、全ての方々が一緒に取り組んでいく世界を作り上げるんだ、それを担保すれば人は来ますよ、という。

ロジックとしては、人を増やすために平等を訴えるということは本末転倒ということをお委員の方々はおっしゃっておられた。

本当にそのとおりだと思う。結局、地域におけるダイバーシティ&インクルージョンがより当たり前の世界になっていけば、人は魅力を感じてくれる。もうそれに尽きるんじゃないか。当たり前のことをできる地域を目指していく。こういう話が先日の会議でも出ていたことを思い出した。色んな考え方があってと思うが、そういう中で委員がおっしゃったように、イベントを含めて地域の方々が誇りに思うような文化や歴史、そして芸術も含め、ダイバーシティ&インクルージョンが進んでいくことによって仲間に入りたいという思いをより強くしてくださる。これを突き進めていくときに、行政として何を、あるいは予算をどう配分していくか、ここを市長をトップとして考えていただく。そこに県も寄り添って色んな財政的支援もありますということになるので、全体を繋げていくと非常に良い話になっていくように感じた。市長に是非コメントいただきたいと思う。

■市長

委員長のお話、県のお話も含めて私自身も痛切に感じているところである。我々香南市役所が今年度から、公共施設のマネジメントを始めた。それと同時にデジタル化も取り組み始めた。そしてもう一つ、やや内容は違うが、学校等の規模適正化というのも、広義の意味でいうと、その中の一つになるのではないかなと思う。

まち・ひと・しごと創生総合戦略で委員長の昨年のお話を聞いて本当に衝撃を受け、自分の中で考え方が変わったのが、4千人が毎年この高知県で生まれたとして、80年経つと人口32万人になるという話。

これまで私自身、香南市は他の地域に比べたら人口の減りが少なく、自分の身の回

りの子どもを取り巻く環境が非常に安定し、充実しているのも、まだ自分の中でやや安心していたところもあったが、委員長のお話を聞き、自分の中で根本的に考え直す機会があった。

先ほどの委員長や本日のお話しの中で、我々市役所の中でやらなければならない、やりたい思考というもの、これまでの思考と変えていかなければならない、ということがある。その一つで、私の中で思っているものにバックキャスト思考という思考方法がある。これまでは、フォワード思考という、今までの、この目の前にあることを一つずつ解決して、その積み重ねによって物事を進めていく。これはざっくりというとの考え方だが、私の理解でいうと、人口ビジョン、人口の目標数に重きを置きすぎて、その目的・目標というのがあまりにも大きくありすぎることによって、それを突き詰めていくと、先ほどの話のように、34歳以下の女性の方を増やさなければならぬ、ということになってしまう。そういう方法・アプローチも必要だとは思いますが、私自身はバックキャストという考え方。例えば、東北大学の先生の有名な話で、自分の中で心打たれたものが、ここに蛍光灯がいくつかある、その中の一つが消えてしまうと、我々は今まで、ここの職員に言って蛍光灯を買い替えなければいけない、と今までと同じことをしていくわけである。しかし、これから我々の将来で考えなければいけないのは、例えば電球が一つずつ消えていく、じゃあカーテンを開けて窓からの光で勉強をすればいいじゃないか、という、そもそも今あるではなくて、これから後にどんどん消えていく電球に対し、一つひとつに付け合わせていくのではなく、そのうちすべての電球が消耗していく中において、じゃあ日の光が当たる昼間にしか勉強や仕事ができない、そういう在り方、そういう生き方もあるんじゃないかなという風な。受け売りだが、それがいわゆるバックキャスト思考という、未来の自分たちを想像し、そこから逆算して我々が今どう生きていくかを考えていく。

その中で、結局のところ人口が減る中において、先ほどの外国籍の方という、実際にすべての産業において外国籍の方に働いてもらう、国の方針を大きく変えれば国で国会議員が決めることだが、実際、我々の目の前にそういう状況があるとなれば、この後我々の多様性とは何かという、外国籍の方々と共にその地域で暮らしていけるということではないかなと思う。

それは全国万遍なくどんどん人口減少が進んで行く中において、デジタルを活かすことによって、これまで都会でしかできなかったことが我々の身の周りでできるようになると、委員がおっしゃったように、県外で同じことをしていたら、地元に戻ってこようかなという人が地元に戻ってきてくれるんじゃないかなと。ざっくりとそういう考え方を私は持っている。

それから、これを私が言うと生意気だが、他の市町村はそれすらもなかなかできない状況になりつつあるんじゃないかなという中において、我々はまだそういった考え方を持っていけるのではないかと。その考え方を持って、そこに合わせて生きていくんじゃないかなと思う。それをどういう形で行っていくか。

例えば、農業において言うと、先週ちょうどこの場所で山田高校1年生の、香美・

南国・香南それぞれの出身で通っている子どもたちの研究発表会というのがあった。それで私は、農業をテーマに出ささせていただいたが、すべての農業が厳しい、しんどいというイメージの中で、意見を取りまとめてくれて、それを今後どうするかという考えを示してくれた。それは割とショックであったが、例えばSNSを使った、T i k T o kで紹介してみんなに広めていこうとか、若者なりに話を作ってくれて色んな提案もいただいた。そこでJAの方は必死に、「農業はすべてが厳しい・しんどいということありません、環境制御で…」と説明するが、なかなかそれが広まり切っていないなと感じた。

それと、ここでも何回も言いかけて言わなかったことだが、香南市として来年度から、この春4月から、農業公社で特別栽培米という減農薬の米を作ることにした。まずは5反作るが、それは天候や色んな状況によって、できる・できないはある。農業がこれまでの、いわゆる慣行農業で合理化をしていく、デジタル化をしていくことによって地産外商を高付加価値化することを香南市は、高知県でも先進的に進めていった。それがある種成功しているので、3千万円くらいかかるが、もう一つの切り口として、減農薬の米を作りそれを求めている都会の地域に売って出たい。それは当然すぐにはいかないで、まずは農業公社で始めるが、それが一定成功すれば、いわゆる慣行農業をされている方、そして新規でやりたい方、例えばその後、有機栽培であったり、オーガニックにいくと相当ハードルは高いが、そこになると投資というのが今まで以上に、いわゆる慣行農業よりもかからない。そうすると参入しやすいし、ある種、都会のそういったことを目的とする人の移住であったりにも繋がると思う。農業の幅を広げていくことによって、「専業農家で稼ぎたい」ではなくて、志であったり、自分で作ることの意義を高められる分野というもの、幅を広げていくのも一つではないかなと。それがうまくいくことによって、例えば、今でも香南市では米は100%香南市産を使っているが、給食米を減農薬にしていく、次に有機にしていく。そのこと自体が市のブランド化に繋がって行く。さらに、高知県の物部川から東でいくと、これから本当に人口減少がこれまで以上に進んでいく中において、香南市で子育てをしたい、安心安全の食べ物、それと同時に農業も香南市のブランド化を作っていきたい。香南市産のものに価値を付けていくということをこれから進めていければと思っている。それもすぐにはできない。そういうことを含めた、香南市というもののあり方、香南市というものを作っていきたいと思うので、市役所の職員の力も要るし、皆様のご協力も要るので、是非あたたかく見守っていただければと思う。答えになっているかわからないが、以上。

■委員長 市長のコメントをいただいたので、事務局のそれぞれの担当からの発言はここでは割愛する。

続いてアンケートの調査結果を元に、委員の皆様とディスカッションしていきたいと思う。

また委員から順番によろしいか。先ほどのアンケート結果の説明を聞いて質問や意

見があればいただきたいと思う。

■委員

アンケート結果については非常に分厚い資料なので、なかなか隅々まで目を通すことはできないが、それぞれ子どもさんの意見があると思う。

野市町は非常に恵まれた地域で非常に住みやすいかもしれないが、中山間にはやはり不便さが際立ってくる。

この間、ちょうど香我美町に初めてコンビニができた。それが唯一買い物できる場所ということで、今まで香我美町の方は、従来Aコープがあったが、その代わりにコンビニができたということで、エーマックス、フジ、マルナカあたりに買い物へ出かけていた人が、すぐ近くのコンビニである程度、生活する分については難しいが、普段の生活のちょっとした買い物ができるような環境ができつつある。

そういった意味で、香我美町にしる夜須町にしる、中山間地域の環境を良くしていくと、そちらの方へ移住されて来る方が増えてくるのではないかと思っている。

アンケートとは関係ないが、最近住宅が増えつつある中で、野市駅から850メートル以内が開発地域ということが言われているが、やはり今住宅が増えてきている。

そういった住宅が増える中、一方で、1キロメートルとなると、物部川の東側まで住宅が増える可能性がある。

住宅が増えるのは良いが、環境もかなり変わってきている。農家が農業しにくい状況にもなってきている。

また、そういった住宅が増える中で、自治会について。私が住んでいるのは高田地域というところだが、ここは農業振興地域で宅地化されていない。

その中で自治会は24~25軒あるうちの8軒くらいしか、もう活動ができない状態である。

あとはもう高齢化で、後継者がいない。多分そういう地域が今かなり増えてきていると思う。

そういった中、やはり近隣の自治会への加入も勧められているとは思いますが、市長にお伺いしたい。今、新しく入ってこられた住民の自治会への加入意識。なかなか取りまとめて、加入しませんか、地域で活動しませんかというのは難しいと思うが、今の若い方が、この野市町の自治会とか地区会の意識をどのように持たれているのかなどいうのを少し聞きたい。

■委員長

質問に関しては、後でまとめてお答えいただくことにしたいと思う。では次の委員、お願いする。

■委員

先ほど皆様のご意見をうかがった時に、委員から「赤岡でお祭りがあるのを野市の子どもたちは、自分のまちのお祭りという意識があるのか」と聞いたときに、「ああ、そうなのか」と、うかがって初めて気が付いたところになるのが、自分が子どもの頃のことを思い出すと、今よりもっと不便だったと思う。でも大人になり、自分が子どもの時、

交通の面であったり、買い物の面であったりというところを、今思い出して、不便やったなと思うかといえば、そうでもないなという思い出がある。ただ、こうやって子どもたちにアンケートをすることで、子どもたちが初めて気が付いたことがあるんじゃないのかなと思う。

このアンケートっていうのはすごく良いことでもあり、将来思い出したときに、自分たちが住んでたところって不便だったんだなということを意識づけるものでもあるのかなと思う。

アンケートの特性は、聞き方によって、子どもたちにどう受け止められるかということもあると思うので、良い答えを求めようとしないようなアンケート調査をしていただき、将来大人になったときにこんなことができるんじゃないかというような、目標とかを子どもたちが気付いて持てるアンケート調査を今後できていくと、より良い香南市が、将来の大人たちによって創られていくのではないかなと感じている。

■委員

委員がおっしゃるように香南市で地域差があるということだが、その地域の良いところもたくさんあると思う。

やはり観光なんかもそうだが、子どもたちに新たな自分の地域の再価値化というか、野市動物園が流行ったように、桂浜水族館もそうだが、日本で一番しょぼい水族館と私は思っていたが、自虐ネタというか、再価値化とか価値創造とかが大事になってくると思う。

今、子どもたちに何が必要かという、やっぱり教育ということになると思う。

委員がおっしゃるように、リアルに色んなものを体験するとか、様々な価値を子どもたちに提供するのが大事じゃないか。デジタル田園都市構想もあって、そのデジタルで、実際に私はフランスの高校生たちと、野市・大阪・京都・フランスで交流したりとか、デジタルを使って交流できるし、また、みんなが都会にあこがれると思うが、その都会の子たちとも話して、都会の良いところや、キャンプブームもあってみんな山とか川とか海にも行きたいと思う、そういう色んな交流を香南市として、デジタルでより一層できないのかなと。

リアルでは修学旅行ぐらいでしかなかなか行けないが、このデジタル田園都市構想じゃないですが、どんどん、日本だけでなく世界、色んな価値観を子どもたちに提供する中で、子どもたちも「ああ、自分たちはコンビニがないとかあったけど、そうじゃないんだ」と、自分たちの地域もすごく豊かなものがあり、良いところ、悪いところ、そういったところもしっかり子どもたちに教えていくことも大事じゃないかなと思う。

■委員

皆さんの意見が素晴らしく、私がここでお話しするのもなんだが、香我美町にコンビニができたという話が出たのでお伝えしたいが、公共交通が不便という面は、すごくこれから私も年を取っていくにあたってすごく厳しいところだなと考えている。

香南市では色んなことをされていて、バスとかそういう取り組みは重々承知しているが、もうちょっときめ細かいところまで、「私はここに住みたい」という方がいた

ら、それに答えていきますよ、というところなんですよね。なので、あそこにコンビニができたのは、私的にはすごく残念。もっと違う形で経営者の方にはお金を使っていたかったなというのが正直な思いである。

■委員

アンケートを見て自分の小さい頃を思い出したが、私は吉川村だった頃の吉川小学校に通っていたので、本当に店もなく、時々連れて行ってもらえる野市のスーパーでも心が躍って、野市ってお店があるきいいなと思っていたが、その後中学から高知市内の学校に通い始めて、そうすると街っていっぱい店があるので、やっぱり香美郡より全然市内の方がいいやん、ってちょっとした都会への憧れがあつて。そこから大学は東京に出たが、東京に行ったらもっといっぱい店があつて、その頃の自分の価値観はというと、仕事といえばバリバリ高層ビルで働いて、お金いっぱい稼いで、みたいなのが憧れとする仕事だったが、その後、自分は旅行会社に入り世界あちこちに行くことになる。そうすると、日本の良さというのを逆に感じて、日本の良さを感じた後に、今度は香南市とか自分のまちの良さというのに改めてすごく感じた。

どんどん外に出て、憧れを持って外に出ていくというのはすごく大事なことで、逆にそこから如何に戻って来てもらうか。やっぱり子どもの時の視点と、大人になって自分の人生を自分で作っていく段階になった時に、必要なものであったりとかほしい環境というのは、子どもの頃とは違って現実的なものになると思う。

香南市にはその魅力がすごく備わっていると思う。なので、委員がおっしゃったように、みんなどんどん夢を持って外の世界に出て、外の世界を知った後に香南市の魅力さをさらにもう一回確認してもらって、「じゃあ、香南市で人生過ごしてみようかな」と思ってもらえるためには、どういう風にアピールをしていくべきかっていうところをもっと広げていただけたらと思う。

■委員

私、夜須町に住んでいるが、夜須町の話は学校等の規模適正化の話になって、色んな保護者とか地元の人とかもよく言われているが、夜須町ってやっぱり、保幼小中から一環でしており、その中で学校と地域で連携が取れており、地域で子どもたちを育てるといことが非常に盛んな地域である。

このアンケートの114ページを見ると、夜須とか吉川の約7割は災害に対して安心できないと思っている。

親に対してはもっとパーセントが大きいかと思っているが、そこを、子どもたちの命、そういう状況で十分な教育を受けられるのかということ。

あと、地元でやっぱり文化の継承とかそういうものを生きがいにしてている方も多いので、みんなで見守ってきたという自負とかもあるので、その辺を今後の総合戦略というか、市の方向として何ができるかを、マイナス意見はあまり反映しないで、プラスの、そういう状況でどうするのかということを中心に保護者や地元の人で考えていって、市の考えに入れていただきたいと思う。

■委員

アンケートを見て思ったことだが、やはり先ほども申し上げたように、地域差が非常に出てきているというところが一つ。それから小学6年、中3、18歳になるにしたがって、段々現実的な意見になっているというところが非常に面白かった。

私も下の子ども二人がちょうど中3と18歳なので、高知市から通っているが、ここが住みやすいのかとか、ここに住んで働くのかと聞かれたときに、おそらく二人とも「わからん」と答えると思う。それは香南市も同じだと思うが、先ほど委員がおっしゃっていたが、自分の育ってきている環境というのは、離れてみないとなかなか、本当にどうなのかというのはわからないので、やはり一回、うちの子なんかもそうだが、やっぱり都会に行きたい、東京・大阪に行きたいという風に言うので、行って仕事をしながら、いざ住むところとして考えたときに香南市が魅力的なのかどうかというところだと思う。二十代後半で結婚して、子どもができて、三十代、四十代になるにしたがって、野市周辺にはなってくるが非常に住みやすいところだというのは身をもって分かるようになる時が来ると思う。その時にここを選んでもらえるような魅力的なまちにしていくというところで考えると、アンケートを取るのには、この年代もすごく楽しいと思うが、例えば結婚して、香南市に住む人とか、家を建てられた夫婦とか、例えば市役所に転入に来た方に同じようなアンケートとってみるとか、どこが魅力でここを選ばれたとかいうような方法も一つあるのではないのかと思った。

■委員

私が言いたいことは委員におっしゃっていただいたので特にないが、一つ、別の会でも発言させていただいたので、それを発言させていただきたいと思う。

アンケートからは外れるが、これから子どもたちが独立する上で、じゃあ香南市内に住みましょと、親元から仕事に行かれる方も多いと思が、移住者、外国の方を含めて、実は住む場所がないのではなかろうかと。

これは香南市に限ったことではないが、よく県が、「所得は低いですが、家賃は東京・大阪と比べて安いから住みやすいですよ」というセールスをかけているが、これでも新規に仕事を始めた若年層の方は、給料自体が安いので、数万円の差ぐらいの家賃でもまだまだ高い。その負担が厳しいということになるので、そのあたりは行政として今後どう支援していかないといけないのかと、直接的な支援にはなるが、考えていかないといけないのではないかと思っている。

■委員長

今一通り委員の皆様のコメントを拝聴し、私も一緒に頷きながらうかがった。

おっしゃる通りで、アンケートの取り方によって全然見えてくる世界が違う。さらに、不便さということに関しては、それぞれのおかれている環境や、それまで経験したものの比較になるので、この部分でやはり小学生、中学生に聞くことについては、一定慎重に、色々な情報を逆に提供することによって、自らの持っている価値というのを、しっかり相対的に認識していただく必要がある。その意味で、ちょっと怖いのは、子どもたちに質問しているということではあるが、この答えは親の意見であるという可能性が極めて強い。その、主体性をまだ自我として十分な育成できていない世代に

対して無理やり聞いている質問自体が、間接的に親のコメントを引き出している、とすると、やはり親の世代に対して、同様の働きかけというのを、どういう風に施策として講じていくかというところに重きを置いていかないといけないと一つ感じる。

それと、委員もおっしゃったように、聞き方というところだが、今行動経済学なんかにおいてはナッジという手法が非常に注目されている。これはノーベル経済学賞を受賞したということがあって、聞き方によって受け止め方が全然変わるということ。

このナッジの利用は色々なものがあるが、例えば臓器移植なんかの意思表示。臓器提供の意思がありますか、というので、何もチェックしていなかったら、自動的に「臓器移植・臓器提供の意思あり」とデフォルトで設定する場合と、「ある場合にはチェックしてください」という聞き方をすると、全然統計データは変わってくる。

これは当たり前のこと。

それから、ナッジの利用として、スーパーのカゴを乗せるカートがあると思う、あれに前の方と後ろの方で仕切りを入れて「前は野菜以外、後ろは野菜」とすると何が起るかというと、野菜の消費量が増える、とか。それから、あまりきれいな例ではないが、アムステルダムで空港でトイレにおける男性便器に、ある印をつけると飛散が減ったとか。色々、ナッジというのは、ちょんちょんと肘で相手をつつくようなことをやって、その方向にもっていきっていくという行動経済学の心理をうまく逆手にとって色々なことを問いかけたり働きかけたりするというやり方。

何を言いたいかというと、アンケート調査によってその方向に導いていくということも聞き方によってできるということである。そういうことを、あまり度を越さない程度にやっていく余地はあるのではないかなと思う。

そもそも、このアンケートは何のためにやっているかということ、細かいデータを引き出すためにやってるというのは明らかだが、このまち・ひと・しごと創生総合戦略を、子どもたち、小学校6年生、中学校3年生、若い世代である18歳の人たちに、見てくださいという形で提示している。

だから回収率が一つのメルクマールになるが、これだけ市の行政の計画を子どもたちに伝えようとしている自治体は多分ない。その部分も、もうちょっと価値として高めていくということも、これから継続していく上では考えていかれてはどうかなど。

それから、還流していくという話のご意見として聞こえてきた。つまり、出さないじゃなくて、出て行って色々な価値を知ったうえで、魅力を再認識して、香南市に戻って来ていただく。

ここにおける、繋ぎ止め、地域に対する愛着がカギを握るので、さっきから話題になっている文化や歴史、またお祭りのような、地域ならではの取り組みを如何に子どもたちの共感や感激を持っていただくように参加してもらうか、すごく大事である。

特に、地域愛を醸成していくときに、例えばスイスのマッターホルンの麓にあるツェルマットという有名なまちがある。あそこに私も何度か行ったが、行った一つの目的として、ツェルマットの小学校に行き、小学校でどういう教育をやっているのかというのを現場で校長先生や学校の先生たちと意見交換をし、授業の現場を視察すると

いうのを一回やったことがある。見て驚いたのは、地域の方々全員が先生である。猟師の方が、猟師という職業を子どもたちに、道具から、現場から、そしてジビエ、野生の狩猟した色んな獲物をしっかりと調理をし、そして提供していく。あの辺り10月、11月といえばジビエの本当においしいものが豊富に提供されるが、それを支えているのが地元の猟師さんである。それを教材に使う。徹底している。

そういう意味で地元愛を醸成していく、さっきの地元の第一次産業の現場をどうやって子どもたちに見ていただくかということと繋がっていくんだと思うが、地元愛の醸成というのが一つポイントになっていくのかなと思って今の話もうかがっていた。

あとはリスクの問題。能登半島地震が起こって、より沿岸地域の住民の方に対しては防災の意識、あるいはリスクをどうやって最小化していくか、ここもこれまでご当地ではゾーニングの話をしつつ、それが今どういう風な形になっているのかという点についても、しっかりと反映していくべきではないかなと思った。

市長にご質問があったが、新しい住民の方々の、地域の自治会への入会だとかその意識に関してお答えいただきたい。

■市長

ありがとうございます。委員からのご質問、自治会への意識というのは、実際問題、新しく入ってきた方で、町内会すら作れてないところが野市町にはあるということで承知している。

そこで、来年度から地域支援課の方とも考えていく、そもそも色々な他の場面では副市長も含めて話をしているが、新しい町内会というか、これまでの町内会、従来の町内会とは違う町内会的なものを、デジタルを含めて作れないものかなと。

町内会に入ることの意義と、なぜ入らないかということをござっくり考えると、例えば、役員をやるのが大変であるとか、様々な要因があるので、それを例えば、思い切っただけでなくしてしまうとか、デジタルで補えるものは補うとか、全体いきなり広げることができないが、地域を限定し、それが可能な地域というのをピックアップして、モデル的に新たな、自治会までいくと大きいのかなと思うが、まずは町内会単位ぐらいでできることをやりたいとは考えているし、そうしないとこれまで通り、町内会を作ってくれ、自治会を作ってくれ、まちづくり協議会を作ってくれといってもなかなか難しいんじゃないかなと。様々な考え方や働き方が多様化していく中で、今までの従来の町内会とか自治会というのが難しい。

しかしその分、町内会を飛び越えたネットワークというのは、香南市内でも様々なわけなので、その形、どういう形が良いかという中で、選択肢を増やしていきたいというのは一つ。「こうする」と変えるのではなく、「こういう在り方もありますよ」というのをモデルケースを作っていきたいと思っている。そうしないと本当にこれから、特に野市町は大変なことになるのではないかなということは承知しているので、是非ご理解いただきたい。

■委員

町内会について。自分も県から来たが、香南市はやっぱり市全体に自治会を作ると

いうことで、香南市全体に職員を張り付けたり、地区単位でやっていたりするが、委員がおっしゃるように、各地域、地域も高齢化していて、なかなか担い手がないとか、一方で野市とか新しい人が入ってきているが繋がりがなくて、という形で。

香南市としては是非とも、全エリアで自治会を作ってもらいたいと思っているが、なかなかそこがうまくいかない場合ということがある。ただ、市長も先ほど言ったように、一定うまくいっている地域は何がうまくいって、地域が一丸となっているのかというのをちょっと研究しながらやりたいと思う。

自分も、今南国市民だが、元々南国市で育っているのではない。自分も新しくその地域に入った身からすると、やっぱりなかなか入りたいとか、色々聞きづらい面もあるので、是非とも地域にいらっしゃる方々が、できれば強引にその町内会に引きずり込むぐらいの動きをしてもらえたらありがたいと思う。

当然、それで入らないという人は仕方ないと思うが、やはり地域と仲良くしたいけど踏み出せないような新しい移住者や、家を建てられた方もいると思うので、そういう動きは、むしろ強引に飲み会するよとか、そういう場を是非とも作っていただけたら。それでも嫌です、という人はなかなか難しいと思うが、そういう動きは是非していただきたいと思う。

■委員長

お答えいただいたので、一通りいただいた意見、今後には是非参考にさせていただきたいということをお願いを申し上げたい。

そして随所にデジタルの力を活用することが解決策の一つになり得るとのお話もあった。

デジタルになれば、今の市の外と内という境目は全くないし、さらに国境を越えてという話も、全くボーダーフリーで自由に考えることができる。ただ一つだけ、色々私も経験して問題だなと思うのは、時差だけは解消できない。日本時間とプラス・マイナス2時間ぐらいの地域とのリアルな交流を中心に考えていかないと、時差があるというのは本当に大変である。

この後、実はIOPの国の評価委員会があり午後2時から県庁でヒアリング対応するが、今、農業振興部の皆さんがオランダのウエストランドに視察も含めて行っている。

推進官がそのヒアリング対応だが、オランダと日本と、もう全くボーダーフリーで、オランダから農業振興部の担当者が参加する。ちょうど午後2時は14時なので、オランダは午前6時である。そういう不便さはどうしようもないが、交流は相当できるようになっているので、その点を念頭に置いていただき、デジタルの価値というのを今後はさらに見つめていただきたいと思う。

非常に貴重なご意見をいただいたので、まずは、限られた時間の中で、ここまでとさせていただきます、「5. その他」があるので、その他の説明をいただきたい。

5. その他

- (1) 令和6年度のスケジュールについて説明
- (2) 任期満了について委員の皆様へ御礼

■委員長 それでは今日用意した、第2回香南市まち・ひと・しごと創生総合戦略策定委員会については、以上を持って終了とさせていただきます。

事務局から話があったとおり、私を含めた委員の皆様は任期満了ということで、一定の区切りを迎えたことになる。

来年度からはデジタルの観点が入っていき、デジ田としてその次の年に向けた準備を進めていくということで、おそらく今日の貴重な意見、これがしっかりと次に反映されていくものと大いに期待を申し上げたいと思う。

冒頭申し上げたとおり、私もちょっと立場が変わるので、今回をもって香南市の委員会のついては卒業させていただこうと思っている。

ただ、それこそ市長、前任の前市長の時代から、前知事の産業振興計画をより地域版として実装・実行あるものとして市をあげてやっていきたいんだ、という想いをいち早く表明されて、そこに私としてお付き合いをさせていただき今に至り、多分、十数年間関わらせていただいたのではないかと思います。

そういう意味で香南市の今後、あるいは大学をあげて色んな意味で、またご一緒にできる部分というのはしっかりと見つけ、また自分たちなりに力添え、協力できる部分を共に汗をかきながら取り組んで参りたいと思っているので、立場は変わるが、引き続きよろしくお願いを申し上げます。

この会については以上を持って終了とさせていただきます。

最後に市長からコメントをいただいて閉会とさせていただきます。

■市長 長時間にわたって貴重なご意見を賜りありがとうございました。

私としては本当にそれぞれ宿題のように感じている話ばかりであった。

しっかりと本日の意見を踏まえて、これからの市政に生かしていければと思う。

そして、委員長、長い間本当にありがとうございました。

先ほども申し上げた委員長のお話し、短い間ではあったが、私自身は自分の考え方を大きく変えるようなお言葉をいただいたと思っている。

これから委員長のこれまで作り上げていただいたものをしっかりと前に進めていきたいと思うので、今後とも様々なところからご指導ご鞭撻のほど賜りたいと思う。

そして皆様、これからも香南市のためにご尽力くださることを心よりお願い申し上げてごあいさつとさせていただきます。

6. 閉会